

第3回 森の復元プラットフォームセミナー

講師 宇沢国際学館 代表取締役

占部 まり 氏

社会的共通資本と森

～新しい資本主義と宇沢理論～

2022年2月6日(日)にNPO法人由良野の森主催の「第3回 森の復元プラットフォームセミナー」が開催された。今回のセミナーも先週開催されたセミナーと同様に、新型コロナウイルスの影響で完全オンラインでのセミナーとなった。セミナー参加者は50名程度であった。

第3回セミナーのタイトルは「社会的共通資本と森～新しい資本主義と宇沢理論～」で、宇沢国際学館代表取締役であり、また医師でもある占部まり氏の講演だった。

占部氏はノーベル経済学賞に最も近かった、世界的な経済学者宇沢弘文氏の実娘であり、宇沢氏が帰国後に盛んに主張していた「社会的共通資本」の観点からの講演だった。社会的共通資本の根本的な思想、森と経済学の関係、そしてご自身の本職である医療と社会的共通資本を、宇沢氏との会話を含めて、本質を理解しやすい内容に噛み砕いた講演だった。宇沢氏と占部氏がかわした会話の内容を講演に組み込むことにより、講演内容の理解が更に進んだ。

経済学的に考えると、森林はストックとして考えられるが、果たしてこの考えは正しいのだろうか？森林内の樹木の総重量によってそのストックを測ると、森林を構成する個々の樹木がどのように成長し、どのように枯れるかによって測ることができる。しかし、ストックの変化は生物学的、環境保全に対する意識、また気象条件によって影響されるため、いわゆる経済学で用いられる資本の減耗や資本とは本質的に異なる。

同様に、規模の経済を考察するときもかなり複雑となる。森林面積をストックとして捉えると、面積が2倍になれば木材生産も2倍になるかという、それは自然的な諸条件等に依拠することになる。したがって、工場生産のストックを想定した経済理論そのまま適用することが難しい。

外部(不)経済についても同様のことが言える。ある水準までは外部経済が働くが、その水準を超えると外部不経済が働くと考えられる。例えば、杉のような人工林を考えると、ある水準までは二酸化炭素の吸収を促進したり、木材生産に寄与したりする。しかし、一定水準を超えると、木材として搬出されるのは道路近くの杉のみで、奥山の杉は費用と便益の関係で搬出されなくなる。手入れについても、人手不足が顕著となることで放置林が増え、二酸化炭素吸収の役割を果たさなくなる。この場合、生物多様性にも悪影響を及ぼす。また、花粉症の人口を増加させることも付け加えてお

く。

森林は人々に豊かな生活を提供する社会的共通資本である¹。豊かな社会の基本的諸条件の中に、美しい豊かな自然環境が安定的、持続的に維持されているという物がある。森林は自然更新されるものではなく、使えるものに育てる必要がある。現代の放置林の問題を考えると、それは一目瞭然であろう。使える森は、自然災害を抑止し、地球温暖化を防ぎ、人間の文化を発信し、多様な生態系を維持する。そのために我々は森林を育てる努力を必要とする。

占部氏の本職である医療もまさに社会的共通資本であると、宇沢氏は考えていた。宇沢氏いわく、「医療の本質はサービスではなく、信任」である。そして、「病院はそこにあるだけで良い」そうだ。病院があるだけで多様な人材を雇用でき、またあるだけでも安心できる。安心はお金では決して変えないものだ。まさに医療も人々の豊かな社会を支える社会的共通資本と言えよう。疾患や障害があっても周りの力などを支えにして気落ちすることなく人生を前向きに歩いていける。その力こそが健康だ！ということだ。地球環境にもこのポジティブ・ヘルスが必要である。そのためには、人と人のつながりが大切であり、経済の根底にある思想につながる。

経済とは、経世済民が語源であり、その意味は「世の中を経(おさ)め、民衆を救済する」ところから来ている。まさに、経済は人と人のつながりを大切にし、人間の心が大事であると言える。森林を復元するためには、お金だけではなく多くのマンパワーを必要とする。森から恩恵を受けるばかりではなく、人とのつながりや人間の心を通じて、森を復元し、持続可能な関係を築いていく必要があることを、本セミナーを通じて学べたのではないかと思う。このような大切な気づきを与えてくれた占部まり氏に感謝の意を評したい。

特定非営利活動法人由良野の森 運営委員
松山大学経済学部経済学科教授
熊谷太郎

¹ 社会的共通資本とは、1つの国ないし、特定の地域に住むすべての人々が豊かな経済生活を営み、優れた文化を展開し、人間的に魅力のある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような自然環境や社会的装置のことをいう。